

いちひろ

TENRIKYO
ICHIHIRO BRANCH CHURCH

〒635-0812 奈良県北葛城郡広陵町広瀬306

立教 179 年
平成 28 年 8 月 17 日
第 293 号

天理教一広分教会
☎ 0745 (57) 0076

おことば抄

道の上の

子供仕込む所、

通常一つの理を

持つて居た分になららん。

(明治34年4月16日)

解説 明治33年4月1日、天理教校は開校する。それは、当時神道本局に属していたところから、独自の教派として本局から独立する動きのなかでのこと。開校当初は仮校舎で出発したこともあって、一年後、本校舎建築が計画され、おさしづを伺われた。その一節である。

私も46年間、教校に関わらしていた者として、このお言葉は何度も耳にしている。それは教校は世上にある学校と同様に思っていないということである。すなわち、開校当時、教職員を一般世界から招いていたので、その人たちの教校に対する理解は、なかなか神意が伝わっているものではなかったと思われる。

道のおける、とくに教校の教育が、学校という意識に捕らわれて、教えの精神を根幹とし、それを徹底せしめるには十分でなかった、ということであろう。

そこに「教校は神の教えを伝え、それを学ぶところ。世上の学校とは違う」ということがいわれた。

戦後、2年制の専修科が発足する。ただ天理大学ができるのと同時に、どこか短期大学のようなとらえ方をするむきもあったようである。その点、二代真柱の思いと違ったようで、70年祭後、改革が行われた。どこまでも神一条に徹した思案ができる人材の育成が目指された。

しかも、昭和52年には、全寮制五カ年の第二専修科が設立され、それこそ徹底した神一条にたった思案ができる人材の育成が企図された。その教育に寮長として携わったことは、まず私自身が、その信心において、徹底した教えの思案のもとで歩むことが必要だった。振り返れば、反省ばかりの念が湧いてくるが……。

(み)

一 広タイ集談所開所式に 参拝して思うこと

タイ出張所長 野口信也

6月5日、城法大教会・一広分教会タイ集談所の開所式にお招き頂き、ほんとうにありがとうございます。

大勢の方々が集まっておられ、また会長ご夫妻を中心に、和気あいあいとした雰囲気、印象的でした。

このたび、所長となられたウイナーさんは、私が約30年前、海外部へ入ったばかりの頃、おちばでお会いしたような記憶があります。

会長さんはじめ、教会ご家族、また清二さん夫ご家族を心から慕っておられ、いつも笑顔で、自然に知人においがけされる姿は、なかなか他のタイの信者さんにはない、信仰を持っておられます。

またヌンさんは、私が海外部翻訳課にいるときに、T・L・Iで日本語を学んでいましたが、その頃、就職活動を、ほんの少しだけお手伝いをさせて頂いたことがありました。

その後毎年、お正月にはお土産を持って、

自宅に挨拶に来てくださり、その律儀さには感服いたしました。

その後、ヌンさんは日本の会社と一緒に勤めるタイの方々に、おちばがえりを勧め、大勢の方が別席を運ばれたことを考えると、お世話になった一広の教会の方々、ひいては親神様、教祖のご恩に報いるため、精一杯つとめておられるのだなあと、感じます。

またピラヤさんには、東日本大震災のときに、東京で被災した経験を、タイ出張所の月次祭講話でお話し頂き、自分の信仰の歩となったことを振り返っておられました。その信仰の元も、教会での丹精によるものです。

一広分教会のタイの道の一部しか存じ上げませんが、こうした方々と接し、教えを芯にたいへん強い絆で結ばれていると、感じずにはおれません。

これまで長年にわたり、理を正しく伝えられ、温かい親心で、一人ひとりの信者さんを大切に育ててこられた、そのお姿は、タイ布教の、また我々布教師のお手本であります。

このたびの集談所開設も、そうした意味でも、たいへんうれしく思っています。これを機に、さらに信仰の和が広がるご守護を戴かれますよう、心からお祈り申し上げます。

会長談

野口信也タイ出張所長さんから、身に余る言葉をお寄せいただいたが、一広タイの道は、一つの形が出来つつあるところで、ようやくスタートラインについたところかなと思いません。いうならば、「これからや」という思いの方が強くなっています。

というのは、まずおつとめができるようになる、これがこれからの目標となるからです。朝夕のおつとめと、その手振りができること。まず、これを目指したい。それには集談所に常駐して、その指導にあたる必要が必

要になってきます。いろいろと思案を重ねていますが、いずれにせよ、手の届くところから、できるところから、進めていきたいと思っております。なにごとも一辺にはいかないのは世の常です。

いままで同様、焦ることなく、立ち止まることなく、少しづつでも、前進していきたいと思えます。

かつて、カイちゃんに、建設途中の寺院をみて、誰が建てているのと尋ねたとき、みんなの寄付で、との返事。それなら、一広もいづれ寄付を募つてやろうか、という話をしたことを思い出します。楽しみに歩もう。



教祖130年祭 こどもおぢばがえり

一広隊として、七月二十七日、七月三十一日と日帰り、八月三〜四日にかけての二泊二日で実施し、それぞれ二名(育成一名)二十一名(育成五色)、四十七名(育成十二名)の少年会員が参加しました。合計、少年会員八十名、育成会員十八名でした。

中学生の参加は残念ながらありませんでしたが、初参加の子が十名でした。天理からも、初参加の子も含めて大勢参加してくれました。哲郎さん家族にも声がけから、引率まで大変お世話になりました。

また、幹治さん・美有さんも夫婦で、忙しいなか都合をつけて引率してくれ、とてもたすかりました。

子どもたちが教祖のお膝元で仲良く楽しく過ごすことを念頭において引率しておりますが、それでも多くのハプニングが起こります。今年もいろいろなことがありました。

朝のおつとめ後、靴を履こうとしたところ一人の子の靴が見当たらず、境内掛で代わりに靴を借りるようになりました。

楽しいおぢばがえりが、急転、憂鬱なものになってしまったことに対して申し訳なく思うとともに、私自身、理の運び方をはき違えているのではないかと反省した次第です。

また、今年はずくに、他の団体と比べても明らかに、うちの子どもたちはまとまりがありません。自分勝手にいろんなところへ行つてしまいます。

その姿を見ていて、自分自身が親に対して添い切れていない部分があるのかもしれないと反省いたしました。

このように少年会活動を通して、自分自身が教祖からお仕込みいただいております。今後も、その都度、お仕込みいただくことを一つずつクリアして、親としてステップアップしていきたいと思えます。

隊としては、他の隊でも同じだと思いますが、中学生層への働きかけ、導き方が課題としてあります。中学生になって、部活動などでなかなか参加できずに遠ざかっていく子たちをどうつないでいくのか試行錯誤を繰り返しております。どなたか、何かよい方法があれば知恵を拝借したいと思えます。



□五十一人のおつとめ奉仕者をお与えいたただこう ◆勇もうさづけの取り次ぎに。

七月月次祭役割表 (平成28年7月17日) 日曜日 午前10時執行

祭主		會長		扨者		贊者		指図方	
会 長		安井清二		安井慎二		安井哲郎		安井清二	
座りづとめ		前 半		後 半					
て を ど り		安井和栄		武田直子		安井妙子		安井幸枝	
笛		安井幹直		安井哲郎		安井清二		安井妙子	
ちゃんぽん		佐々木登喜子		安井真智子		西井千賀子		西井千賀子	
拍子木		池尻喬信		佐々木登喜子		榊井怜子		榊井怜子	
太鼓		山本理恵子		安井美有		中川修		中川修	
すりがね		西井千賀子		西井英樹		中川光子		中川光子	
小鼓		安井哲郎		池尻喬信		会 長		安井真智子	
琴		安井幸枝		山本理恵子		安井真智子		安井真智子	
三味線		中川ヤヨイ		大橋芙美代		武田直子		武田直子	
胡弓		武田直子		安井妙子		安井美有		安井美有	
地 方		兵市会長		出口道信		安井幹直		安井幹直	
中 川 修		日 榿 敏 郎		安 井 慎 二		安 井 慎 二		安 井 慎 二	

□挨拶 会長。講話 安井清二。献饌長 安井清二 伝供 出口道信、中川修、安井哲郎、西井英樹 ▽本年の実績↓初席者6名。おさづけの理拝戴者0名。修養科生1名。検定講習0名。三日講習会0名。

編集後記

▽うだるような暑さが続きます。いかがお過ごしでしょうか。ちよっとお伺いします。私は、というところ、この暑さに負けそうです。かつてエアコンは夜しかつけなかったのですが、この夏は、もつあがたいないと思いつつ、ときどき昼間からつけています。

▽永田瀬奈さんが、学修高校の部を受講し、15日元気に帰会。楽しかったとのこと。

▽ミナさんが、修養科タイ語クラスを受講され、7月27日、無事修了されました。まことにめでたうございます。一広月次祭を終えて、19日夕方、帰国予定です。4カ月余の日本滞在でした。集談所での、おつとめ指導に力になってくれるでしょう。期待しています。

▽先月15日から、ちようど一ヶ月。ソテツの花の部分がしおれ。頭を下げております。と同時に、次の葉が下から芽をだしています。

